

# 土地を持たない、農村部の働き手達による活動@*Brasil*

~ MST の紹介 ~

外国語学部ポルトガル語学科  
A0056053 田辺洋太

国際政治経済論演習  
2005年1月7日

## はじめに

現在の世界、つまりグローバル化された社会で生活する我々は、貧困撲滅や飢餓撲滅など本来ならば全人類が享受できるであろう、衣食住に関する問題を解決しようとさまざまなプログラムを行ってきた。そのような取り組みの中には多くの成功と多くの失敗が存在した。私は上からのプログラム、つまり世界機関や政府が主体による取り組みよりも、下からのプログラム、つまり生活苦のなかにいる人間の意志のもと行われた取り組みの方が持続性を持ち、価値ある成功を収めてきたように感じた。

Movimento dos Trabalhadores Rurais Sem Terra (以下 MST) とは、ブラジルの農村部で行われている農地改革運動のことで、土地なし農民運動と呼ばれている。150 万人以上の農民が参加する実力抵抗運動である。リーダーは 1993 年より活動に参加し現ブラジル下院農業改革委員会所属のシッホ=コヘアである。

この運動は下からの改革に属するものであり、その中でも過激な方に部類される。しかし、政府を動かし国内に根付いてきている。さまざまな地域で、さまざまな下からの改革がある。MST はブラジルだから生まれ、そしてブラジルだから受け入れられ、社会変化をもたらす可能性を秘めているのだと思う。貧困や飢餓のような社会問題は、過去に歩んできたその国の文化によって、ひとつひとつがちがうものなのではないだろうか。各地域に根付いた運動でこそ、その国の社会問題が解決するのであろう。

第一章で MST の設立からその目標、第二章でブラジルにおける土地問題の歴史と MST の台頭する背景、第三章で占拠活動の方法と対抗する農場主の間での闘争をブラジル社会とともに見ていき、第四章で MST の草の根運動としての活動を、第五章では現ルーラ政権について簡単にふれていく。

下からの改革はコミュニティーでの共同生活と民主主義を用いることで、成功を収める可能性が高まる。その活動が発展していくためには、地域社会のとの関係が不可欠である。ブラジル独自の社会背景により生まれた MST の活動は、さらに発展しながら現在の世界秩序に変化を与えることが可能であるとして論をとじた。

## 第一章、 MST の歩み

1960 年代から 1970 年代にかけて、オレンジや大豆のような新たな輸出作物を生産するため、大土地所有制が拡大し多くの小農民が土地を奪われていった。そして農業技術が大きく発展した時期でもあったため、それまで雇われていた小作農民たちの仕事も奪われていった。多くの農民が土地や家、仕事を失い農村から都市へと移っていった。残った農民も、土地を持つことなく季節労働に従事することとなった。

1979 年 10 月 7 日、ヒオ・グランジ・ド・スウの土地なし農民がホンダ・アウトのマカリー農園を占拠する事件が勃発した。この事件は、国内で盛んになってきていた民主化運動とあいまって、ブラジル南部の各州で同様の事件が起きるようになった。カトリック教会「開放の神学」の教徒や左翼団体のバックアップのもとで、土地なし農民による農地占

拠は拡大していき、1984年には、パラナ州で行われた第1回農村部土地なし農民会議でMSTが設立された。彼らは生産活動の行われていない休閑地を大人数で占拠し、農地を獲得するために活動を続けていった。1990年代には、南部地域だけでなくブラジル全国に広まる大きな運動へと発展していった。発足当初は、都市部に出て行った後にも仕事を得られなかった元農民を農村部に復帰させ、農村部の土地なし農民とともに、生活可能な土地を取り戻すことが目的であった。その目標も現在では『農村地域で階級闘争を展開すること』へと変化しており、土地の獲得はその第一歩になってきている。

## **第二章、ブラジル土地問題**

そもそも、ブラジルの土地問題は植民地時代から始まったといわれている。1500年にカブラルがブラジルを発見すると多くのポルトガル人がブラジルへと入植しはじめた。1532年、統治を行っていたポルトガル王室は、当時のブラジル領土を15のカピタニア（行政区）に分け12人のドナタリオ（行政官）に治めさせた。ポルトガル国土を超える広さのセズマリアまであったほどで、ドナタリオ達はその多くを入植したポルトガル人に無償で与えていった。大多数の者が40000畝以上の土地を譲渡され、その土地の防衛と開発をおこなうように命じられた。その後の入植者たちも未開の土地を切り開き、自ら開拓と防衛をすることで、広大な土地を手に入れていった。

19世紀末、奴隷制が廃止され小作人が生まれた。そしてヨーロッパやアジアから多くも移民が入植してきては、大農園の小作人になっていった。飽和状態となった大農園であったが、20世紀半ばの工業化のおかげで、多くの農民が都市部へと移り住んでいった。さらに都市部への移動に際し、小農民が手放した土地は大土地所有者のものへとなっていった。

このように大土地所有者が強い力を維持している社会においてならば、大規模農業が発展していく中で、小農民が土地を手放し都市部に移っていったのも当然の事態であったのだろう。そして土地を持たずに小作農民として働いてきた地方で近代的農業が発達すれば、多くの小作農民の仕事がなくなることは免れないことであろう。そしてその社会の中で、有り余ってしまった、生産活動の行われていない土地が存在するようになったわけである。使用されていない農地の大きさは、全農地の60%ほどもあるとまで言われている。

1996年現在、全農家の1%程度の大土地所有者が全農地の45.1%を所有しており、全農家の50%以上いる小農民が全農地の2.2%を所有している。実際に数値を挙げると、15950万畝の農地を大土地所有者が、778万畝の農地を小農民が所有していることとなる。尚、ここでの大土地所有者は1000畝以上の農地を、小農民は10畝以下の農地を持っているものとした。

## **第三章、占拠と闘争とブラジル社会**

MSTの活動とは、土地（一家族あたり3畝～20畝）、住宅資材、水道、電気、補助金、技術指導、マーケットアクセスなど生産活動を行なうために必要なものすべてを政府に要求

することである。彼らが他の団体と違うのは、この要求の仕方が対話ではなく実力行使という点である。確かに、あらゆることが対話で解決するならばこの世に貧困問題など起こらないのであろう。その実力行使というものの、暴力によるものでなく、占拠という手段を用いている。対話の通じない行政に対して、自らが体を張って土地の占拠に行っていくのである。彼らは数百人の仲間を夜中のうちにトラックで運び込み、土地を占拠し、そこに入植させてしまう。土地の獲得が実現するまでは占拠した土地にキャンプを張り野営して過ごす。何ヶ月でも何年でも、彼らはそこにとどまり続けるのだ。

彼らのそういった行動に対して不快を示し、彼らを強制排除しようとする者がいることがこの問題を深刻なものとさせている。それが大土地所有者というわけだ。生産活動を行っていない土地であろうと、占拠されていくのは彼らの土地である。先祖から受け継ぎ、将来必要になる可能性のある財産である。また、農場につながる道路や農場自体を占拠されれば、彼らの生活に支障をきたす。MSTの活動をただ黙って見過ごすなんて出来ないわけである。

MSTが発足する以前から、大土地所有者と土地なし農民との闘争は存在していた。1960年代から軍警察も交え、土地の手放しを拒む小農民や小作農民と殺し合いが行われていた。MSTの占拠と大土地所有者との間での紛争は毎年500～700件起きている。2000年頃からは年20人前後と殺人にいたるケースは減ってきているものの、90年代は年100人以上が殺されていた。今でも大土地所有者は、自衛団を組織したり殺し屋を雇ったりしているのだ。

このブラジルで生きる者にとって、自衛団や殺し屋を雇うことはいたって普通のことなのである。スラム街では武器商人がおり、毎日のように銃撃戦が行われている。道端には毎朝死体が転がっている。都市部にはストリートチルドレンと呼ばれ、路上で生活している少年少女が多数いる。彼らは生き抜くために万引き窃盗を繰り返す。ブラジルの治安が悪い原因はここにもあるともいわれている。一般の店主たちは子供たちを処分するために殺し屋を雇う。毎朝のようにギャングやストリートチルドレンの死体が道端に転がっており、それを回収する業者までいる。殺し屋という商売が成り立っている国だから、農村部でもこのような闘争が起きてしまうのである。

実力行使に訴えることに慣れた文化、生活を守るためには他人を殺すことも認めているかのような文化だからこそ、MSTが生まれたのかもしれない。そのようなことを思うと、自衛団や殺し屋との闘争も必然のように感じる。悲しい現実であるが「テロをもちいなければこの世が変わらない。」という思いに通じてくるように思えた。

MSTは占拠地を選ぶうえで二つの選択をする。ひとつは、使用されていない私有地や公有地に入り込み、そこでキャンプを張って生活する方法である。これは植民地時代の地主と似た方法である。生産活動が行われていない休閑地に侵入し、自分たちの土地であるかのように生活してしまうのである。数年間にわたり暮らしてしまい、行政も強制撤去できないような状況をつくりだし、農場主と行政から入植を認めさせるのである。もうひとつ

は、わざと人目のつきやすい土地を占拠する方法である。こちらはマスコミや行政に自分たちの行動を明らかにするのが目的で、その後の交渉によって他地域の占拠中の土地、もしくは新たな入植地の確保を目指した活動である。たとえば、幹線道路や農業主が作物作っている農場を占拠するのである。2002年には大統領であったカルドーゾの敷地内に占拠したこともある。占拠をやめる代わりに生産活動の行われていない公有地や私有地を分け与えられることとなる。後者の占拠の仕方は好戦的であるが、このような態度をもっているからこそ政府も相手にするようになったのであろう。

#### **第四章、 キャンプでの共同生活**

彼らが土地を占拠する際は黒いビニールテントと赤い旗を掲げている。家族単位で占拠地に入り込み、そこで共同生活を行なうのである。デモや交渉などをしながらも、農業や牧畜をして家計を築き、今後の生活の予行練習をしているのである。共同で生活することや、マーケットへアクセスする方法を学んでいくわけである。さらには、コミュニティーのなかで教育も行なっている。彼らは新しい土地を得る前の準備段階として、占拠生活のなかで、共同生活を体験していくのである。ここでの生活を身に付けているからこそ、実際に土地を手に入れた後でも自分たちの力で暮らしていくことが出来るのであろう。そして、そのことがこの運動が持続し、成功している大きな要因となっているのであろう。

実際に、新しい土地を手に入れ入植していくのは、何年も占拠キャンプで生活してきた者が優先されていく。共同生活に不慣れの者が土地を手に入れても、土地を売って都市部に戻り、コミュニティーを崩壊させてしまう可能性があるからである。実際に占拠キャンプで生活した者ですら、新たな土地での生活に失敗することもあるぐらいである。苦労して手に入れた土地を有効に利用するために、ただ手に入れるだけでなく、後のこともしっかりと考えているわけである。

彼らは農地が分割されると、40家族ほどの単位で入植していく。この単位が彼らの長年の経験で培ってきたコミュニティーの最良な大きさである。ひと家族あたり20~30畝の土地が分配され、さらに政府に住宅建築材、水道、電気、学校などを要求する。そして10~20家族単位で組合を作らせ、その組合で共同生活を続けていくこととなる。コミュニティーないでの交流は当然のこと、コミュニティーから代表者がでてコミュニティー間でも頻繁に交流がもたれる。炊事や、蒔き割りなどの小さなことから教育や医療、インフラなどの生活に必要不可欠なこと、さらには国家の政策やWTOについてなど、様々な話し合いの場ももたれている。MSTのコミュニティーで強く意識されて入るのが「全員参加」の原則である。コミュニティー内の仲間を排除せずに、全員参加で納得できるまで議論が行なわれ決定される。当然、男女平等の精神も強くあり、コーディネーターは男女一各づつでなければならないし、参加意欲のない女性であっても半強制的に役割を与えられてしまう。共同生活をしていくためには全ての人々が責任をもち協力し合って生きていかなければなら

ないからである。このような活動を全てのコミュニティーに広めていくために、MST 全体の集会や州ごとの集会を開き、リーダーの育成であったり、より広範囲において共通の議題で話し合いを持ったりしている。MST の教育に関する取り組みも意識が高い。国連大学の調べによると、600 人の教育者が MST の識字プログラムに参加し、入植地の小学校 1000 校で、50000 人の生徒が勉強し、2000 人の教員が配置されているとのことである。

コミュニティーのなかで、彼らは目標を忘れずに生活している。既存の体制を打ち砕くという目標を実現するために一步一步前進している。そのひとつに、「食卓に毒をのせない」心情がある。彼らは無農薬作物を生産し、遺伝子組み替え作物は生産しない。化学の進歩によって生み出された農薬や、遺伝子組み替え作物は現在のグローバル化した社会の模範であろうし、そのような化学進歩の恩恵を受けた大土地所有者によって、貧困層は拡大していくばかりであるのだから。彼らの作るものは現代社会のスタンダードとは別のところになくなくてはならないのだ。ほかに、仲介業者を利用せず、自分たちの手でマーケットにアクセスする試みも行なわれている。これも古くから残っている体制で、やはり貧富の差を拡大させてきた要因であるからだ。このような行動のひとつひとつが目標の現実に繋がるのであろう。

コミュニティーの中には、外部市場とは極力関係を避けているところや、各々が労働した時間を管理ノートに記載し、通貨を用いずに生活しているような場所さえある。地域通貨のようなシステムも既存の体制からの脱却を期待がもてる。

## **第五章、ルーラ政権下のブラジル**

現在のブラジル大統領はルーラである。就任前の彼は「経済成長、雇用創出、所得再分配」を公約にかかげていた。さらに彼は「貧困の撲滅と飢餓ゼロ」と言う言葉を古くから唱えつづけてきた。彼の所属する PT (ブラジル労働者党、以下 PT) は、左翼政党であり、反独占、反 IMF、農地改革推進を旗印とした政党であり、昔から MST の活動を支援してきた団体であった。PT が政権を握ることは MST にとっても念願で、その選挙活動に充分貢献した。MST はルーラが大統領になれば農地改革が行なわれ、大土地所有者の土地は無償で手に入ると思っていたし、そうでなくとも、土地の確保は安易なものになると信じていた。ルーラ当選を確実にするため、2002 年の選挙戦前はその活動を自粛していた。

そしてルーラが政権に就くと、1 ヶ月後には前年度比で倍以上の占拠運動を再会させた。それはルーラ政権が彼らに対し寛大であるからとも考えられるし、一方で政権が農地改革を進めないことへの不満とも捉えられた。ただ、彼らの活動は今まで以上に今後も大きくなっていくことであろうということである。これまでのカルドージ政権下ですら 60 万強の家族に土地が与えられたのだから、支持政党が政権を握っている限り、MST の要望は過去のそれを上回るのは必至である。

しかしルーラ政権は選挙前に確約してきたことをことごとく反故にしている。政策金利の切り下げや公務員の給料アップなどがその際たるものである。彼が実現させたのは最

低賃金の増加だけなのである。社会的弱者に対する政党であったにもかかわらず、一向に改革には乗り出せていない。支持団体や同 MST 内からも批判の声が大きくなりつつある。一方で世界各国政府、市場関係者、国内の社会的強者はその穏健的に変った姿勢を評価している。この点からもルーラ政権が就任前とその態度が一変したのがうかがえる。

原因として、この政権が PT、PL(リベラル党)、PV(グリーン党)、PDT(民主労働党)、PSB(ブラジル社会党)、PCdoB(ブラジル共産党)、PTB(ブラジル労働党)、PPS(人民社会党)らによる連立政権である点とブラジルも国際社会の中を生きていかなければならない点がルーラの前に大きな壁として立ちふさがったのだ。

PT は労働者党と名前であるが、労働者階級だけでなく、公務員や中間層を含めた市民政党である。連立で政権を維持するということは、他の政党の意見も聞かなければならないということである。党内ですら様々な支持団体の意見をまとめることも難しいのだから他の政党の間で意見をまとめられるわけがないのだ。幅広い有権者を満足させなくてはならないために抜本的な改革に踏み出せないのであろう。

2002 年ルーラの大統領当選が有力になると急速にレアルが下落し始めた。この頃からルーラの態度に変化が現れだした。前大統領カルドージが引き継ぎ期間を設けたこと WTO からの融資を取り付けたことも影響しているようである。彼は、外貨なくしては国の存続が危ぶまれてしまうと感じたようである。この政策転換によりレアルも 1 \$ 3 R \$ ほどで安定しているし、外資企業の撤退もない。前年度比でインフレ率を 2 ポイント下げたし、プライマリー財政黒字目標を GDP 比 3.75% から 4.25% に引き上げることも成功した。ルーラはこのような政策転換は対外安定を維持させた後に国内へと目を向けるためとしているがこれに関しては将来どうなるか不明瞭である。

2005 年をむかえ、ルーラの任期も後 2 年になった。対外的な信頼を勝ち得たとは言い難いが、そろそろ国内に目を向けてもよい時期である。MST 問題に立ち向かわずとも「経済成長、雇用創出、所得再分配」の公約を実現する方法はあるかもしれない。ブラジルという国に本当の信頼を勝ち取らすために後 2 年でなにかしらの結果を見せてほしいものである。

## おわりに

二章と三章から、MST はブラジルでしか成功しない革命であると感じていただけであろうか。ブラジルは極端な土地配分のあった国であり、力を用いて生活を勝ち取る精神をもった文化であった。一般市民に危害を加えるテロリストよりは穏健であるが、どこか通じるところがあるように思える。四章でふれられているが、彼らは全員参加の民主主義と共同生活の精神を持っていることがテロリストとは違うのであろう。彼らがコミュニティーのなかで行なっている活動はとても重要なことなのだと思う。

MST が掲げている『農村地域で階級闘争を展開すること』という目標は現在の社会秩序を打ち壊す可能性が大いに期待できるように思う。また、だからこそルーラが政権に就く

際にリアルの下落が起こったのであろう。世界的にもブラジルという国の重要性は増してきている。ましてや、アメリカ合衆国のお膝元であるラテンアメリカで上と下がひっくり返るようなことになれば、世界の流れは大きく変わるに違いない。MST と PT の持っている目標はアメリカをはじめとする先進国諸国にとっては脅威となる目標であり、それが実現した時に、貧困問題や南北問題、飢餓がなくなるのだと思う。

### 参考文献

小田輝穂著、『カヌードス・百年の記憶』現代企画室、1997。

加茂雄三著、『ラテンアメリカ』自由国民社、1999。

堀坂幸太郎著、『ブラジル新時代』勁草書房、2004。

松下洋、乗浩子編、『ラテンアメリカ 政治と社会』新評論、2004。

中南米情報誌『そんりさ』日本ラテンアメリカ協力ネットワーク、79号、85号。

<http://www.mst.org.br/home.html> (MSTホームページ)

<http://www.nikkeishimbun.com.br/Mainpage.html> (日本語版、ニッケイ新聞ホームページ)

[http://www.spshimbun.com.br/index\\_jap.cfm?alteraIdioma=J&CFID=474933&CFTOKEN=17335937](http://www.spshimbun.com.br/index_jap.cfm?alteraIdioma=J&CFID=474933&CFTOKEN=17335937) (日本語版、サンパウロ新聞ホームページ)

[http://www.jimmin.com/2003b/page\\_014.htm](http://www.jimmin.com/2003b/page_014.htm) (人民新聞)

[http://www.jimmin.com/2003b/page\\_014.htm](http://www.jimmin.com/2003b/page_014.htm) (人民新聞)

[http://www.maff.go.jp/kaigai/2002/f\\_brazil.htm](http://www.maff.go.jp/kaigai/2002/f_brazil.htm) (農林水産省海外農業情報)